

## 歴史探訪 Part II - ②7

江戸川木材工業株式会社

顧問 清水 太郎

先日の報道で、あのスーパーボランティア尾畑春夫さんが、都内の中学校で講演の後、故郷の大分まで1,240キロを徒歩で帰る、と宣言して歩き始めました。行く道すがら、多くの人々がひと目会いたいと馳せ参じ、記念写真を撮ったり、食料や、夜テントで寝るのは寒かろうと、ホッカイロ等を差し入れ、浜松まで来たときは、リヤカーに荷物は満載となり、人が人を呼んで、細い道の両側は車が並び、大渋滞となりました。尾畑さんは、万が一の事故を心配し、娘夫婦の運転する車で、全行程の残り980キロを残して大分に帰ってしまいました。

この賑わい振りを見て、私の所属する東海道ネットワークの会第59回例会のお知らせで見た街道エッセイを思い起こしました。我らの仲間上林武人氏は、全長500キロの行程を17泊かけて歩き(東海道 一気通貫達成)、途中台風24号、25号に見舞われ、江尻宿からいったん帰京。又、足裏の水ぶくれに悩まされるなどしたもの、幾多の発見と出会いに満ちた街道歩きを楽しむことが出来たと回想されております。

日本橋で父親の興した呉服店のあった横丁に先ず一礼、「父母が香の木犀頼み七つ立ち 鈴鹿峠では 赤とんぼ妻の鈴背に鈴鹿越え 三条大橋の欄干では 加茂流れ追善菊に旅終わる」と今は亡き京都生まれの両親に手向けの菊を投げたそうです。

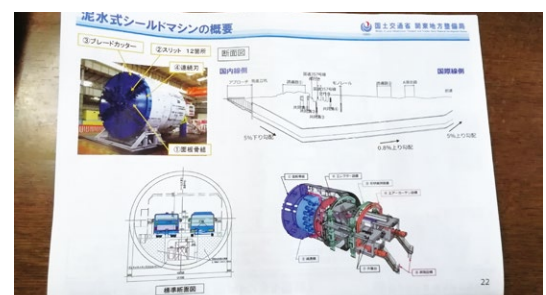
3月26日の例会でお会いして体験談が今から楽しみであります。

何故この二つの快挙を採り上げたかと申しますと、尾畑さんは私と奇しくも同じ79歳。上林さんも70代で、お二方とも私が足元にも及ばない快挙を達成されました。

今日(3月8日)、某会合で東京国際空港視察会がありました。2020東京五輪に向けて、羽田空港と周辺の都市改造が急ピッチで進められております。

空港は滑走路の増設、一部多摩川の河口にかかるため、自然環境に支障を来さぬよう、埋め立てを避け、1,600本の杭を打ち、その上に強固な路盤を乗せます。それでも東日本大震災では、10センチ程のずれた跡が見られます。地下に大型バスが行き交えることが可能になるよう、直径12mのトンネルを泥水式シールドマシンでトンネルを構築しています。機械が土砂を削り、ポンプで泥水を運び、機械が通過した後は鋼鉄製のセグメントを組み、トンネルを掘り進んでゆきます。2020年には4千万人が来日しますが、そのためには2分に1度の離発着が予想され、滑走路の増設が不可欠となります。30名の見学者は2分間隔で轟音と共に離発着する飛行機を少年に還ったようなまなざしで興味深く眺めておりました。

4月から駒沢大学聴講3年目の講義が始まります。週3日、4単位90分、20単位の予定であります。自宅からも近く、決して無理をしないであと数年続けたいと念じております。組合事務局T氏に励まされつつ、よい報告が出来れば幸甚であります。



泥水式シールドマシンの概要